

木村貢氏（元大平首相政務秘書官）に聞く

遺品を心の支えにして

―聞き手・阿部 穆



第5回国連貿易開発会議総会のためにフィリピンを訪問した大平外相、木村貢秘書官（総理の左後ろ）と森田一首席秘書官。（右端は御巫清尚駐比大使（マニラ市にて・1979年5月9日～10日）

池田総理と大平官房長官との間柄

——木村さんは文字通り大平さんの分身として、いろいろ関ってこられたわけですが、木村さんの場合は池田勇人総理との関わり、それから池田総理を誕生させる自民党総裁選挙、池田内閣ができて大平官房長官が内閣を支えて運営する、それらを池田邸で目の当たりに見ておられる。その頃の池田さんと大平さんとの間柄といえますか、雰囲気とは、どんなふうな感じだったのですか。

木村 池田総理は自分が思案にくれた時に、よく「大平を呼んでくれ」と言つて、大平先生の所へ電話を掛けることが多かったですね。それから、特に（大平先生が）外務大臣の頃は、「こつちへ来て、ちよつと説明してくれ」と……。つねに大平先生の所在が分つていないと安心できないような状態だったですね。

——そのことはね、実は宮澤喜一さんも、言つておられるんですよ。それは、池田蔵相、大平秘書官、宮澤秘書官時代の話なんですけどね、（大平さんは）秘書官として仕事をそんなに一生懸命にやるというのではなくて、時々、現れると、大平さんが来るといふことで池田さんは、精神的に安定する、そういう、一種の、表現は悪いけど、精神安定剤みたいな存在であった、ということでした。そうなんですか。

木村 そうなんです。何か気にかかることや心配事があると、つねに大平先生に相談をしております。やっぱり大平先生が言つと、（池田総理は）安心するようでした。

——それは大平さんの何ですか。どういふところが、池田さんが安心するといふか……。

木村 やっぱり大平先生の能力というか、人間性から来るもの……。人柄というか人間性というものを、そういうように高く評価していたんじゃないかと思うのですね。あれに相談すれば……。という安心感ですね。

—— だけど、(大平さんの) 所在がなかなか捕まらないこともあったでしょう。

木村 あつたら、自分らが叱られるわけですから……。 (笑い)。「探せ」と言われて……。

—— 大平さんは、池田さんだけじゃなくて、池田さんを取り巻く人びと、例えば経済界では桜田(武)さんとか、官界では三好(重夫)さんとか、古井(喜実)さんとか、それから同郷の先輩の津島(寿一)さんとかね、先輩方に非常にかわいがられたという特質があつたように思いますが、それはどうですか。

木村 やっぱり人間の間口というか、人間が大きく広がつたからではないかと思えます。あの人の悪口というか、そういうたぐいの話は聞いたことがないですね。

—— 栄家の女将さんなんかも、その一人ですね。名前は何て言いましたかね。

木村 和田栄子さんです。

—— あの人も広島(出身)でしょう。

木村 ええ、広島です。

—— 池田内閣ができた時に、「寛容と忍耐」というキャッチ・フレーズが打ち出された。大平さんが考えたと言われているでしょう。寛容も忍耐も、大平さんが考えたのですか。それを、そのまま池田さんは「うん」と言っただけですかね。

実 木村 そうですね。やっぱり、それほど信じていたと思うんですよ。

就 — 昼はカレーライスを食べて、夜は料亭には行かないとか、ゴルフには行かないとかいうのは、それも皆な大平さんのアイディアですか。

去 木村 そうです。池田総理はよく箱根の井上別邸で、仙石原の方に向かって「コンチクショー」と言つてゴルフのボールを打つておられたようですよ。

— 池田さんが病気になるれて、宏池会の第二代会長を前尾（繁三郎）さんに譲られるわけですね。それは、前尾さんがやっぱり池田さんの親友だったからですか。

木村 そうです。大蔵省時代、税務署長時代からの親友だったから……。池田総理は「わしの頭を前尾の頭と取り換えるか、身体は前尾に……。どっちかに取り換えるといいんだがなあ」というような感じで……。」「そうすれば何でもできるわ」と言つておられました。

— だけど、大平さんに対する見方というのは、池田さんと前尾さんとは、ちよつと違つていたでしょう。

木村 ちよつと違つてましたですね。やっぱり、まあ三人は友人というか、そういう気持ちはあつたと思うんですが、池田総理は大平先生には自分の弟分といいますか……。前尾先生には親友、大平先生には弟分という気持ちだったと思います。

— 大平さんは前尾さんのことを「兄貴、兄貴」と言つてましたね。でも、ちよつと微妙な関係じゃないですか。それで、大蔵省の系統の人が宏池会には多かつたわけですけども、何と云いますかね、池田さんが大平さんを可愛がった、あるいはいろいろ仕事してもらつたのに対して、同じ大蔵省

でも例えば黒金（泰美）さんとか宮澤さんとかは、池田さんとは直接つながっているわけだけでも、ちよつと大平さんの関係というのは微妙な人もいたわけでしょう？

木村 それは、あつたかも分りませんですね。それぞれ性格も違うし……。池田総理としては、どつちかと言うと、「大平、大平」で進みましたね。つねに側にいないと安心できないというような感じでしたね。

——それは、大平さんに対する池田さんの態度と、黒金さんや宮澤さんに対する態度とでは、ちよつと違うんですか。

木村 ちよつと違うところがありましたね。やっぱり、大平先生には何でも言うというか。まあ人事の時なんかは、やはり大平先生の意見を聞くことが多かったですね。

—— だけど、黒金さんや宮澤さんも、可愛がつておるでしょう。

木村 もちろん、あの先生方も信頼して使われた人たちですよ。

—— そういう大平さんであつたけれども、昭和四五年（一九七〇年）でしたか、宏池会の会長交代があつたでしょう。この時は、前尾さんも大変、悩まれたけど、大平さんも非常に悩んだわけですね。木村さんは見ておられて、どんな感じでしたか。

宏池会の会長交替劇の雰囲気

木村 大平先生と同輩の人が数人おられましたね。伊東正義さんとか、浦野幸男さん、服部安司さん、佐々木義武さんとか、残り全部は憶えていませんが、ああいう先生方が、やっぱり代わっ

実 たほうがいいという気持ちを強く持つてました。それを、大平先生が半ば抑えながら、ずつつと維持してこられたと思います。

華 — 交替の決め手になったのは経済界だという話がありますが、そうなんですか。答えにくければいいです。否定はせずということ……。 (笑い)

去 木村 否定はしませんね。

— それはね、今里広記さんの回想録かなんかに出てくるのですよ。桜田さんが、はっきり前尾さんに言うわけですよ。「あなたは、坊さんか学校の先生になれば良かった人なのに、政治家になった。政治家は決断が必要だ。見てると、なかなか決断しないから、この際どうです。決断されて大平君に譲られたら、どうですか」と、はっきり言ったという話があるんですが、何か聞いておられますか。そういう雰囲気は

木村 そういう雰囲気はありましたね。その頃、桜田さんの所へ私、行ったことがあるんです。桜田さんが「宏池会の中はどうなってるんだ。騒がしいことが書かれているな。実態はどうなんだ」と言われますから、「やっぱり、そういう声はこの(宏池会)の中にもあるし、部屋の外(派外)にも広まっています」と答えました。そうしたら、「君、どう思うか」と言うので、「いや、私は何とも言えません」と答えたら、「このまま放っておいたら、いかなあ」と。「そうです」と私が言ったら、ちょうど土曜日ということを書いておいたから、いかなあ」と。「そうです」と私が言ったら、前尾君に待っててくれと言ってくれ……。」ということを言われたんですよ。何か言うんだなという雰囲気はありましたよ。

——それで予定どおり、前尾さんと桜田さんの会談は行われたんですか。その時に結論が……。

木村 出たんじゃないかと思えます。それから、動きが急になってきた。前尾先生も随分、考え悩まれたと思います。

——大蔵省では（池田、大平の）二人とも東大卒でない赤切符ということですね。それで、いろんなことがあつて、福田赳夫さんとの争いというか、最初は協力して後で争いになるわけですがね、大平さんと福田さんの関係はどうですか。福田さんのサイドと協力しなきゃいけないという工作というか連絡は、主に伊藤昌哉さんが担当してたと思うのですが、それに対して批判する人たちもいたわけですよ。片や田中系と仲良くしたほうがいいというのと、いや福田と協力しなけりゃ政権が取れないというのと……。それは、どんなふうな感じだったですか。

木村 やっぱり田中角栄先生はしょっちゅう池田邸に来ておられました。池田総理との親戚関係とということで、信濃町（の池田邸）へ。

——田中さんは、ああいう調子で、自然体で信濃町に出入りしてたわけですね。

木村 そうです。

——それが結局、池田さんが佐藤（栄作）さんを指名することになるのですか。

木村 いや、それは関係ないと思えますよ。

——佐藤さんといえば、大平さんと佐藤さんとの関係は、あまり良くなかったような気がするのですが……。佐藤内閣の時、折角、日米繊維交渉をやっている、大平さんがまだ通産大臣を続けるつもりでいたら、宮澤さんに代えられちゃったりして……。何か佐藤さんと個人的な感情のもつれがあつ

たんですか。

木村 あんまり良くなかったでしょうね。個人的なものもあつたと思います。

——それでは、話を元に戻しますと、福田さんと協力してやっていたけれども、最後はうまくいかなかった、結局、大福決戦ということになる。今まで協力してきたけれども、それなら勝負せざるを得ないということになったんですか。それとも、その前に、木村さんも存知だろうと思っけれど、ある一定期間（二年間）、福田さんが総理をやつたら、次は大平さんに譲るといふ話があつたでしょう。証文とか……。

大福協調から大福対決への内幕

木村 あつた、あつた。何か書いたものを受け取つたとか、金庫に納まつているとか聞きました。

——田中六助さんは、よくそれがあると言つてました。大平さんは、ある意味では、その証文があるとかないとかじゃなくて、福田さんを信頼していたわけですよ。

木村 信頼していました。

——だけど土壇場で打つちやられるわけですね。

木村 そうですね。あの時、私は総裁予備選の支度をしていました。全国の党员党友の獲得対策をやっていました。そして宏池会の秘書さんたちに地元の様子を聞くと、「大平のほうは、そんなことはまだやらなくていいと言っているけれども、福田さんのほうは、ほとんど党员集めをしていますよ」といふ返事がくる。私はそれを聞いて、大平先生に「地方の情勢はこういふ状態なので、支度だけは

負けずにやっておきましょう」と申し上げましたら、大平先生は「そう無理をしなくていいよ。秋になったら、いい風が吹くから」と言われました。佐々木義武先生だったかな、「いい風が吹かなかつたら、どうするんだ」と言っていました。

——「いい風」とは禅譲のことですか。

木村 禅譲のことでしょう。そういうことにしか解釈できないわけですから……。

——伊東さんは、どっちかと言うと、大福協調のほうだったんじゃないんですか。

木村 そうです。

——じゃ大平さんに近い人の間でも、意見は割れていたという……。

木村 割れていたというよりも、皆な一生懸命、大平先生のことを思ってるんですが、その考え方としては、どっちの戦略を探るかということでは違っていました。

——どうして大平さんは最後まで禅譲というのを信じておられたのか、本当によく分らない。

木村 分らないところだと思っんですね。私たちさえも、その「いい秋風が吹く……」とは信じられませんでしたから。

——福田さんとの関係は、どうだったのですかね。良かったんですか、悪かったんですかね、よく分らない。

木村 はじめは良かったんですよ。良かったから、ああいうように行ったり来たりしたんですね。

(福田内閣の) 幹事長もやっただでしょう。

——大福連携という形で、大福体制ができた時に、私は福田さんとお会いした。感覚がちよっと違

実 ったのは、福田さん自身が大平さんとは政界でも大蔵省出身で、ずうっと付き合いがあって、結構、何でも話し合っていた時が、あつたんじやないかと思つたら、福田さんは「全く大平君とはちゃんと話したことがないんだよ」とおっしゃつたのを、未だに覚えてるんですけどもね。大平さんと福田さんが二人で話し合いをするということは、以前はあつたのですか。

木村 いや、あんまり聞かないですね。

——鈴木善幸さんなんかは、初めから田中派と協力して道を拓けという論者ですね。それで、結局、大平内閣ができる。その後は、ご承知のとおり選挙で負けて、四十日抗争に突入して行くわけですがね。その頃の大平さんはどんな心境だったのですか。やっぱり、選挙に負けたから辞めるというわけにはいかないという心境だったのですか。その頃は、どんなふうな顔付きをしていたのですか。

木村 私らには、その当時の大平総理の様子には非常にきびしいものを感じました。ショックは隠せなかつたようです。

——一般消費税の問題ですか。

木村 一般消費税です。

——そこで、福田陣営が結束して、本会議で決選ということになつたでしょう。自民党から大平と福田という二人の首相候補が出て、本会議で決選するということになつたじやないですか。辛うじて大平さんが、新自由クラブの協力を得て勝つわけですけど、その頃は、やっぱり福田さんには負けられないといいますが、そういうふうな強い意志があつたのですか。

木村 強い意志はあつたですね。

——その強い意志はなんですか。

木村 やっぱり自分は総理になって、やらなけりゃならないという大きな課題があったんじゃないかと思うんです。大平総理の気持ちの中には……。

——木村さんが見ておられて、それはどどういう課題ですか。大平さんが、その時これをやりたいというのは……。

木村 一般消費税でしょうね。やっぱり均衡財政に戻そうということでしょうか。大平総理は、あの人なりに財政構造改革というものが頭の中にあつたので、それを実行しようと思つたのでしよう。

——その執念ですか。それで、大平さんが再選されて内閣ができるわけですけど、それから半年後、内閣不信任案が可決されて、衆参同日選挙ということになるわけですよ。最後の時、昭和五五年（一九八一年）六月頃の大平さんは非常に疲れていたと思うのです、肉体的にも精神的にも。

衆参同日選挙は強い精神力から

木村 肉体的にも精神的にも、極度に疲れていました。しかし強い精神力を持っていたから、あの戦死した時の選挙をやつたんだと思うのですがね。

——それで、いよいよ選挙に入つて、第一声を自民党本部前でやつて、東京都内を回つたり、横浜へ行つたりして帰ってきて、倒れるわけですよ。その時、木村さんは、どこにおられたのですか。

木村 当日は、この（宏池会）事務所にいました。

実

——具合が悪いというのが分かったのは、何時頃でしたか。

就 木村 まあ選挙中ですから、大平総理が帰られる頃、その日の状況を報告に行きます。そういうこととで、あの日も何時頃、帰ってくるということは大体、分かっていたので、夕方ですけれども大平邸に行きました、その時に……。

去 ———瀬田ですか。

木村 そうです。その時に、大平総理は伏せっておられました。

——木村さんが大平邸に行った時は、もう寝ておられたのですか。

木村 寝ておられた。

——遊説は途中で止めたんですか。それとも全部やっただんですか。

木村 夕方まで全部やった。五月三〇日の参議院選の告示日ですね。六時少し前には瀬田の自宅へ帰られたはずですよ。

——田中六助さんは、「俺が付いていたら、早く止めさせたんで、助かったと思うが、残念だった」ということを言ってますけど、それはどうですか。

木村 そうだったと思います。大平総理は当日の午後、横浜で演説をやることになっていたので、そこへ行く時に、顔色が悪かった。具合が悪いんだなと思って、党本部の秘書の佐藤テル子さんも心配していましたね。

——木村さんも、党本部で総理の顔色を見ておられたんですか。

木村 ずっと見ていました。悪いことは悪いんです。「遠慮したらどうですか」と言っただけ

も、そのまま横浜へ行かれたんです。

——木村さんが、瀬田の大平邸に行かれた時は、もう入院の話は出ていたのですか。

木村 入院の話はまだ聞いていませんでした。

——それで木村さんが行ってから、相談が始まったわけでしょう、どうするかと。まず遊説の日程をどうするかと、それからご本人をどうするかと。

木村 遊説日程は全部、断ると。二時間後、救急車のサイレンを鳴らさないで来てもらい、虎の門（病院）に入院ということになったのです。

——しかし総理番の記者が見ておるわけでしょう。

木村 いや、総理番は全部、帰しました。それからですよ、とにかく絶対に洩れないようにと打ち合わせをしました。そして総理を担架に寝かせたまま、救急車にお乗せしました。

——木村さんも、一緒に行かれた？

木村 いや一緒には行かなかった。一緒に行ったのは森田一秘書官です。

——それでは、いよいよ病院での生活についてうかがいますが、木村さんはしょっちゅう病院に行っておられたわけだけでも。どうですか、大平さんは選挙のことを気にしていたのですか、それもサミットのことを気にしていたんですか。

虎の門病院での大平総理の容態

木村 每晚、行ってましたけれども、気にしていたのは両方ともですよ。

—— 目前に迫ったベネチア・サミットに行けるか行けないか、選挙に勝てるか勝てないか、みんなそこへ集中したわけでしょう。

木村 そうです。

—— ご本人は、どんなふうな様子でしたか。一回、総理番の人が代表取材をやりましたよね。

木村 ベッドの上でね、写真を撮りました。あの頃、もうすでにお悪かったようすです。医師団はやらせないほうがいいと……。だけど、写真を撮らせないと新聞記者が悪いように書くから、同日選挙に悪影響するだろうと考えて……。

—— それで、あの写真になるわけですね。記者団とのやりとりは、何分ぐらいでしたか。

木村 それはあったが、憶えていません。

—— 大体、サミットに行くという決心だったのですか。

木村 決心だったと思います。

—— で、佐藤嘉恭秘書官に行ってもらって、階段が何段あるとか、他に注意することがあるかを調べてもらうという話でしたね。木村さんは見ておられて、そういう前向きな感じだったのですか。

木村 ご本人は、そう考えておられたようすです。

—— それで、いよいよ問題の六月一日の夜になるわけですが、その日は木村さんは、ずうつとおられたのですね。まずその夜は、桜内義雄幹事長と塩崎潤総務局長が選挙情勢の報告にきたんですね。木村さんは、それをずうつと聞いておられたのですか。

木村 いや、お二人が入った時には、私は外に出ましたけどね。

——それで、夜が更けて木村さんしかいなくなるわけですね。

木村　そうです。皆いなくなる。それで中に入ったわけです。私は毎日、選挙情勢の報告に行っていました。あの日も資料を持って部屋に入った。だけど、一日の夜は特に熱心にお聞きになるんです。北海道から、ずうっと順に聞きながら、途中で、「あの人を落としちゃいかな」とか、「この人は大事にしてやらないといかな」とか言いながら、終わり頃のほうになって、もう一一時ぐらいだったと思います。そろそろ帰ろうと思って立ちかけると、「おい、待て、待て」と言われるので、帰るに帰れずにまた説明を続けていました。「青森がどうで……」というようなことが飛び出した時に、看護婦さんが入ってきたんです。「もう遅いですから遠慮して下さい」と言うので、立ち上がったんです。そしたら、「まあ、いいんだよ、いいんだよ。いや、この人と話していると、妙な音楽が聞こえてくるんだよ」ということを、看護婦さんに言うわけです。だけど、看護婦さんは「早目に。もう遅い」と二度も言ってきたんです。それでも大平総理が引き止めるので、いろいろな話をしていると、奥様がこられて、「もう帰りますから明日また」とおっしゃると、総理はいきなり奥様の手を強く握られたのが印象的でした。それからご本人が眠りかけたので、私は黙って静かに病室を出ました。

——容態が急変したのは、それからですか。

木村　で、家へ帰ったのが一二時半頃だったんです。香川県の大平事務所へ電話を入れ、「総理はサミットへ行かれるようです」と報告し、それから風呂に入ってビールを飲んで、「さあ寝ようか」と思ったのが午前二時五分頃、そこに電話がかかってきたわけです。「容態が急変しました」と於久昭臣秘書官から電話がかかってきたので、「これは大変だ」と病院へ行ったら、もう人工呼吸をやっているん

実 就 去 華 就 実
です。伊東先生、田中六助先生、秘書官が全部、揃いました。医師団は人工呼吸を続けていました。

——田中六助さんが、「人工呼吸は不適當なので止める」と言っただけですね。

木村 あれは五時一七分かな。その辺のところはポーツとしてなんとでも……。

——今から考えてみると、木村さんの声が妙なる音楽に聞こえると言ったのは、何だったんでしょうね。もう何か天から呼ばれていたような感じがしますな。

総理が「妙なる音楽が聞える」と言っただけ

木村 大平総理が「妙なる音楽が聞える」と言っただけは確かです。看護婦さんは二度も来たのですから……。

——田中角栄さんの『大平正芳回想録 追想編』の「大平正芳君の思い出」の中に「翌朝、行く予定だった」と書いてありますね。田中さんは、容態が急変したということは知っていたのですか。

木村 私が田中元総理にお電話しました。そして、「すぐ行く」と言われましたが、私の背後から医者が『まだ治療中』と言ってくれ」ということを言ったものですから、「まだ治療中なので、ちょっと待ってください」と言いました。そして田中元総理は「わかった。行っていい時に、すぐ電話をくれ」と言われました。

——田中さんは亡くなったと分かったら、すぐ来たんでしょう。

木村 すぐ来られました。そして私に「然るべきところへは電話したか、亡くなったということ」

と言われました。

——木村さん自身はその時、どんな感じだったですか。

木村 だんだん思い出して来ちゃって……（少し涙声で）。「いよいよ駄目かなあー。助からんかなー」という気がしましたね。

——木村さんは、池田さん以来、ずうっと宏池会を世話してこられて、大平さんの総理大臣を実現しようとしてきたのに、そんなことであつ気なく死んじゃうわけでしょう。がっかりしたんじゃないですか。

木村 頭の中は真っ白でした。すべての処置が終わわり、ご子息の大平明さんと二人で呆然とたたずんでいる時、明さんが「おやじ」と号泣しながらご遺体にとりすがっていたのを、今でも鮮明に思い出します。ご遺体が運び出された後、枕に手を当てると、その下に何かハンカチに包まれたようなものがあつたので、お守りかなと思ひ、そのまま未だに宏池会の金庫に納めてあります。私は、それは何でもよかつたのです。ただ、大平総理の枕の下にあつたものをいただきたかつたのです。

——へーえ。それは、いまここに宏池会の守り本尊として、置いてあるわけですか。

木村 置いてあります。だから何かの時には、（涙声で）天にいますこの人がどういふ判断をこ指導下さるだろうかと思つているのです。

——いまでも、そう思いますか。

木村 そう思っています、いつまでも。

実 就 華 去

木村貢（きむら・みつぎ） 一九二六年、広島県生まれ。五〇年、北海道大学卒、五七年六月、宏池会に勤務、六一年九月、宏池会事務局長に就任、現在に至る。この間、五七年八月から六五年八月まで池田勇人代議士の秘書、七八年一二月から八一年四月まで大平正芳内閣総理大臣秘書官、九一年一月から九二年六月まで宮澤喜一内閣総理大臣秘書官を務める。また池田勇人、前尾繁三郎、大平、鈴木善幸、宮澤喜一、加藤紘一の六代の宏池会会長に仕える。